

三浦綾子「続氷点」より

三井弥吉（三井恵子の夫）戦争中、妊婦を殺す。罪の自覚。恵子の不倫を知っていた。

三井 潔（達哉の兄）

三井達哉（潔の弟、陽子の腹違いの弟）

啓造、書店でキリスト教雑誌の随筆を読み、陽子に語る。（罪とは？）

「ある人がね、牧師に、わたしには罪はない。なぜキリスト教は人間をすべて、頭から罪人扱いにするのか。それは一体どういうことなのだ、と詰め寄ったそうだ。するとね、その牧師が、じゃ君、あの大きな石をここまで持ってきてくれないか、と庭の石を指した。その男は、漬け物石の倍もあるその大きな石を、よいこらしよと、運んで来た」

「牧師はさらに、その大きな石と同量ほどの小石を持ってくるように言った。男が、小石を沢山集めて持っていくと、牧師は、今度はそれらの石を、元の場所に戻すようにと聞いた。男は困った。大きな石だけは、どこから運んで来たか、はっきり覚えている。だが、沢山の小石は、どこにどの石があったか、分かるわけではない。小石は一つも元に戻せなかった。」

陽子：「おもしろいお話ね」

啓造：「おもしろいだろう。つまり、人を殺した、強盗に入った。これが我々には大きな石なんだね。しかし、うそをいった、腹を立てた、憎んだ、悪口を言った、などという日常茶飯事は小石なんだな。つまり、ひとには始末のつけようがないんだね。」

老婆（糖尿病患者）の例、同室の者に無視される、無関心 医者の許しも得ずに退院した。無視した訳ではない。が、老婆はいたたまれぬ程の疎外感を感じた。

何の罪意識のない行動のつもりでも、この老婆にとっては、その無関心は、むち打たれるよりもつらかった。

陽子「本当の人間の幸福って、結局は自分自身の内部の問題だと思うの」

順子「不幸を知らない人には真の幸せは来ないわ。ね、陽子さん、わたしね、幸福が人間の内面の問題だとしたら、どんな事情の中にある人にも、幸福の可能性はあると思うの」

「天が高いわよ。人間が低くなると天が高くなるのね」

夏枝の父「津川教授」の言葉、陽子に

「おじいさんの育て方が、間違っていたことは確かだよ。夏枝は母親を早くになくしたものであるからね。まあ一口で言うと、甘やかしたんだよ。恥ずかしい話だが、おじいさんは夏枝を叱らなくてね。何でもよしよしとって育てたんだ。注意すべき時にも注意せず、したいままにさせておく、これもひとつの捨て子だね。手をかけないのと同じだよ。」

「一人の人間を、いい加減に育てることほど、はた迷惑な話はないんだね」

「自分一人ぐらいと思ってはいけない。その一人ぐらいと思っている自分に、沢山の人がかかわっている。ある一人がでたらめに生きると、その人間の一生に出会うすべての人が不快になり、迷惑をこうむったりするのだ。そして不幸にもなるのだ」

真の意味で自分を大事にすることを知らない者は、他の人をも大事にすることを知らない。

「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」(ジェラルド・シャンドリの言葉)

「自分は自分の功績やら、名声ばかり集めようとして、生きてきたようなものだった。」
「あくせくして集めた金や財産は、誰の心にも残らない。しかし、かくれた施し、真実な忠告、あたたかい励ましの言葉などは、いつまでも残る」

順子(佐石の娘)の養父(相沢)の言葉

「子供に恵まれない親と、親に恵まれない子供です。似合いの親子ではありませんか」

相沢の薬局に貼ってある色紙の言葉

「ほうたいを巻いてやれないのなら、他人の傷にふれてはならない」

辰子の言葉より

「自ら復讐するな。復讐するは我にあり、我これを報いん」

「真に裁き得るものだけが、真にゆるし得る」

禅の思想

「内面をきびしく凝視した一つの宇宙が、枯山水の庭」

「ただ、木一本、石一つでも、それがあるべくしてあるのであり、これは欠けてもよいというものが、一つもない。それらがお互いに影響し合い、役立ち、調和している。つまり、木一本、石一つ、すべてに存在の意義があり、使命があるということ」

続氷点のクライマックス

流水が燃える光景

「じっと、そのゆらぐ焔をみつめる自分の心に、ふしぎな光が一筋、さしこむのを陽子は感じた。またしても、ぼとりと、血の滴るように流水が滲んで行く。(天からの血!) そう思った瞬間、陽子は、キリストが十字架に流されたという血潮を、今目の前に見せられているような、深い感動を覚えた」

三浦綾子「こころの友」1971年8月号から

「人を裁くことが、なぜ罪かを改めて知らされたような気がした」

「裁くことは、自分が正しいという位置に座し、自分が正しいという確信を持つことだ。裁きの座につく方は、神おひとりだけである。人間が裁くということは、神を押しつけ、その神の座にすわることなのだ。神を信頼しない者は、神に裁きを任せておけないのだ。この傲慢さは、日常の私たちの姿でもある。そんなことを思いながら、私は陽子を書いていた。また裁くのは陽子だけではない。登場人物同志がお互いに随所で裁き合っている。私は人間の恐ろしさを自分の中に見ないではいられなかった。」